

報 告

芥川水系（大阪府高槻市）から2009年～2013年に記録された魚類

芥川緑地資料館（あくあびあ芥川） 花 崎 勝 司

Fishes from the Akuta-gawa river system (Takatsuki City, Osaka Prefecture, Japan) during 2009 to 2013. Katsuji Hanazaki (*Aquapia Akutagawa*)

要旨：淀川水系の一支川域である芥川水系（大阪府高槻市）における生息魚類の現状把握と既報との統括的比較，ならびにその記録個体を標本として収集，博物館資料として蓄積することを目的に2009年5月から2013年6月に本調査を行った。その結果，本水系から8目14科40種が記録された。優占種はオイカワ，カワムツ，およびカワヨシノボリであった。在来種と考えられる33種の中には，本水系から初記録となるヌマムツ，カネヒラ，シマヒレヨシノボリ，トウヨシノボリ，ならびにマハゼなどが含まれていた。タカハヤは本水系の支川から多くの個体が記録された。既報において中・下流域にかけて記録が少なかったアユが2011年から2012年にかけて多獲された。国外外来種としてタイリクバラタナゴ，ニジマス，タウナギ，カダヤシ，ブルーギル，オオクチバス，およびタイワンドジョウの7種が記録された。

キーワード：芥川水系，淀川，魚類，初記録種，タナゴ亜科，ハゼ科，外来種

はじめに

芥川は大阪府高槻市を北から南に縦走し淀川に合流（淀川大堰から約25kmの地点）する淀川水系の一支川である。その本川流路延長は約24kmであり，出灰川，田能川，萩谷川，および女瀬川など10以上の二次支川を有する芥川水系（以下，本水系）を形成している（芥川緑地資料館，2013）。本水系に生息する魚類についての既往報告には，水野・宮城（1964），渡辺（1971），高槻公害問題研究会（1979a），大阪陸水生生物研究会（1983），平松ほか（1998，1999），永井（2008）などがあり，15～25種程度の魚類が報告されている。しかしこれら既報では芥川本川（以下，本川）のみ，本川上流の支川域のみ，もしくは本川における漁業権漁場のみを対象としており，上記支川を含ん

だ本水系全域についての調査は行われていない。筆者は2009年5月から2013年6月までの期間，本水系における生息魚類の現状把握のための記録の収集，追認性を保持するための標本蓄積を目的に採集・調査を行ってきた。本報ではその調査結果を踏まえ，若干の考察を試みる。

本研究を進めるに当たっては，NPO法人芥川倶楽部の田口圭介理事長と関係各位，芥川漁業協同組合の奥正雄組合長ならびに事務・組合員各位，芥川・ひとと魚にやさしい川づくりネットワーク（愛称：芥川倶楽部），たかつき環境市民会議水環境保全グループ関係諸氏には標本採集をはじめとする多岐にわたる観点でご協力をいただいた。一般市民の皆様には採集個体を当館収蔵標本として快く寄贈いただいた。これら関係各位ならびに市民の皆様には厚く御礼申し上げる。また，2名の匿

名査読者の方々には、有益かつ的確なご指摘、およびご教示を頂いた。あわせて感謝の意を表する。

調査期間と方法

本報での調査期間は2009年5月から2013年6月までとした。調査地点は本川の上流から下流にかけて、いくつかの支川を含むように、のべ45地点（図1）を選定した。採集は投網（目合12mm，数～10回）とタモ網（目合2mm，約15分間）によったが、各地点の川床状態や観察会などの行事を兼ねた調査などではタモ網のみ、もしくは投網のみにとどまった地点もある。2009年と2010年に採集された魚類は、その大半を固定用10%ホルマリン溶液で固定、その後保管用同溶液、もしくは70%エチルアルコール溶液に移し替えた。これら標本は、本水系における今後の分類学、ならびに生態学的研究などにおける観点から重要、かつ多

様な情報をもたらす可能性の高い「自然史材」となる。また、自然史系博物館施設では、その地域における「自然史材」である資料の収集と保管を、その重要な目的の一つとしている。これらのことを考慮し、本研究における上記期間の採集個体については、芥川緑地資料館魚類収蔵標本（AQP-F）として登録・保管した。2011年以降では、特筆すべきと思われる魚種のみを標本とし、それ以外のものは現地ですべて放流した。放流した魚種については本結果には含めていない。なお一般市民、ならびに関係団体により前記期間内に採集・当館に寄贈された魚種のうち特筆すべきと考えられた種については本結果に含めた。分類群の配列と同定は概ね中坊（2013）に準拠したが、スジシマドジョウ種群とトウヨシノボリの和名・学名については、前者ではNakajima（2012）に、後者については鈴木・陳（2011）に従った。本調査による採集は、芥川漁業協同組合の同意を得、大阪府の特別採捕許可の下に行った。

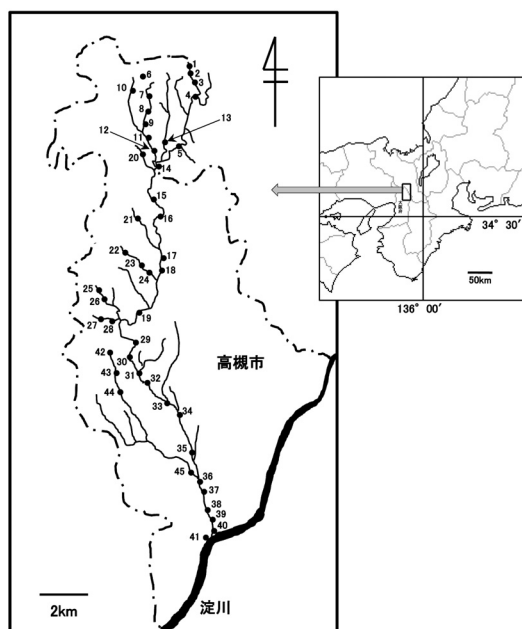


図1. 芥川水系と調査地点.

結果と考察

総調査回数は84回であった。記録魚種は8目14科40種3538個体であった（表1）。これら40種のうち、在来種もしくは淀川下流・河口域から遡上してきたと考えられるアユ *Plecoglossus altivelis altivelis*、ボラ *Mugil cephalus cephalus*、およびマハゼ *Acanthogobius flavimanus* を含む33種が本水系から記録され、外来種としてタイリクバラタナゴ *Rhodeus ocellatus ocellatus*、ニジマス *Oncorhynchus mykiss*、タウナギ *Monopterus albus*、カダヤシ *Gambusia affinis*、ブルーギル *Lepomis macrochirus macrochirus*、オオクチバス *Micropterus salmoides*、およびタイワンドジョウ *Channa maculata* の7種の生息が確認された。これら外来種のうち、タウナギを除く6種は、特定・要注意外来生物であっ

た。各地点での調査回数と記録魚種の多寡については表2に示した。また、本研究における記録種のうち、画像資料を提示することにより、その客観性を高める可能性のある種については、図2・3に示した。以下、上位優占3種について、また、本水系において論議されてきたことが皆無、もしくは少なかったなどの観点から支川域での記録が目立ったタカハヤ*Phoxinus oxycephalus jouyi*、大阪府では準絶滅危惧種に選定されたアユ、大阪府下における分布情報が少ないヌマムツ*Candidia sieboldii*、初記録となったアブラボテ*Tanakia limbata*とカネヒラ*Acheilognathus rhombeus*を含むタナゴ亜科Acheilognathinae、本水系のほぼ全域で記録されたカワヨシノボリ*Rhinogobius flumineus*を除き、下流域を中心に採集されたハゼ科Gobiidae、および外来種という7項目について若干の考察を試みる。

上位優占3種

上位優占種として記録されたのは、オイカワ*Opsariichthys platypus*、カワムツ*Candidia temminckii*、およびカワヨシノボリであり、最前者から順に28.5%（個体数1008）、16.7%（同589）、および10.4%（同369）で総個体数の55.6%を占めた。これらが優占種として記録されることは、水野・宮城（1964）、高槻公害問題研究会（1979a）、さらに永井（2008）などでも述べられており、本結果もそれらを支持するものとなった。オイカワはほぼ本川のみの中流から下流域を中心とした18地点で記録された。カワムツとカワヨシノボリについては本川、支川ともに記録され、その地点数は前者で26地点、後者で34地点であり、両種ともに本水系全域に分布するものの、その記録個体数は上流域で多い傾向にあった。これら3種の分布傾向は、1962年に調査を行った水野・宮城（1964）、1972年から1978年に調査を行った高槻公害問題研

究会（1979a）とほぼ同様の結果となった。これら既報と本研究では、その採集期間・地点数、ならびに採集方法において同一ではないため、単純に比較できるものではないが、近年にいたる約50年間では、これら3種の優占度と分布傾向には大きな変化はないものと推察される。なお、カワムツとカワヨシノボリについては、前記した通り支川域でも記録されており、前者が支川域14地点で147個体、体長13.0~111.6mm（計測個体数34）、後者が同18地点で135個体、体長12.0~53.6mm（同43）であり、稚魚から成魚にいたる成長段階の個体が記録された。したがって、これら2種にとっては支川流域も生息適地として機能していることが示唆された。

タカハヤ

本種の記録数は32個体（0.9%）、その大半は田能川、中畑川、流谷川、岡山川、および松尾ノ谷川など上流支川で採集された。その体長は20.8~68.8mm（計測個体数18）であった。渡辺（1969）は本水系上流域に生息する魚類について報告しており、近縁種のアブラハヤ*Phoxinus lagowskii steindachneri*については記述しているものの、本種についての記述はない。しかし渡辺（1971）ではアブラハヤの記述はなく、本種についてその分布状況をはじめ、他魚種の生息について言及しているものの、アブラハヤと本種の異同については明示していない。さらに渡辺（1973）は本種が、今回記録された岡山川、松尾ノ谷川などにも生息することを記述しているが、この報文においてもアブラハヤの記載はない。本報告では、この近縁2種の異同について論議することを目的にはしていないため、今後の検討課題項目のひとつとして記述しておくにとどめる。したがって、本報と渡辺（1971、1973）のみとを比較した場合、本種の分布域については、約50年前と大きく相違するこ

表 1. 芥川水系から記録された魚類 (2009年 5 月～2013年 6 月).

	総個体数	体長 (mm)* ¹		採集地点数
		平均±標準偏差	範囲* ²	
コイ科 Cyprinidae				
1. コイ <i>Cyprinus carpio</i>	3	97.1 ± 21.3	67.1-114.4 (3)	3
2. ギンブナ <i>Carassius</i> sp.	62	57.3 ± 47.0	14.7-107.0 (24)	9
3. アブラボテ <i>Tanakia limbata</i>	2	47.0 ± 2.0	45.0-49.0 (2)	1
4. カネヒラ <i>Acheilognathus rhombeus</i>	12	57.3 ± 6.2	44.3-65.3 (7)	2
5. タイリクバラタナゴ <i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>	2	18.4 ± 1.4	17.0-19.8 (2)	1
6. ワタカ <i>Ischikauia steenackeri</i>	1	44.5	—	1
7. ハス <i>Opsariichthys uncirostris uncirostris</i>	1	62.6	—	1
8. オイカワ <i>O. platypus</i>	1008	56.3 ± 25.0	14.0-113.1 (154)	18
9. カワムツ <i>Candidia temminckii</i>	589	42.0 ± 24.6	9.0-125.5 (117)	26
10. ヌマムツ <i>C. sieboldii</i>	180	48.0 ± 25.0	15.5-131.4 (50)	10
11. タカハヤ <i>Phoxinus oxycephalus jouyi</i>	32	40.9 ± 14.8	20.8-68.8 (18)	10
12. ウグイ <i>Tribolodon hakonensis</i>	3	63.7 ± 19.3	46.2-90.6 (3)	3
13. モツゴ <i>Pseudorasbora parva</i>	173	44.9 ± 13.5	17.0-67.7 (71)	13
14. カワヒガイ <i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i>	1	93.1	—	1
15. ムギツク <i>Pungtungia herzi</i>	39	52.7 ± 18.3	15.0-99.1 (24)	6
16. タモロコ <i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>	3	65.6 ± 2.5	63.2-69.0 (3)	2
17. ヨドゼゼラ <i>Bivia yodoensis</i>	1	34.4	—	1
18. カマツカ <i>Pseudogobio esocinus esocinus</i>	305	58.1 ± 19.7	16.5-104.1 (74)	12
19. コウライニゴイ <i>Hemibarbus labeo</i>	73	82.0 ± 17.5	59.6-119.4 (11)	3
20. コウライモロコ <i>Squalidus chankaensis tsuchige</i>	57	59.7 ± 7.9	45.5-74.6 (28)	6
ドジョウ科 Cobitidae				
21. ドジョウ <i>Misgurnus anguillicaudatus</i>	19	61.8 ± 26.5	20.0-115.4 (18)	9
22. シマドジョウ <i>Cobitis biwae</i>	1	64.7	—	1
23. チュウガタスジシマドジョウ <i>C. striata striata</i>	1	48.5	—	1
ギギ科 Siluridae				
24. ギギ <i>Tachysurus nudiceps</i>	5	98.3 ± 94.9	22.5-281.0 (5)	2
アユ科 Plecoglossidae				
25. アユ <i>Plecoglossus altivelis altivelis</i>	187	91.9 ± 23.7	51.2-173.3 (187)	10
サケ科 Salmonidae				
26. ニジマス <i>Oncorhynchus mykiss</i>	1	360.0	—	1
タウナギ科 Synbranchidae				
27. タウナギ <i>Monopterus albus</i>	4	239.1 ± 183.4	36.0-530.0 (4)	3
ボラ科 Mugilidae				
28. ボラ <i>Mugil cephalus cephalus</i>	8	77.6 ± 40.2	28.0-127.8 (8)	2
カダヤシ科 Poeciliidae				
29. カダヤシ <i>Gambusia affinis</i>	126	22.2 ± 7.0	11.7-36.1 (29)	6
メダカ科 Adrianichthyidae				
30. ミナミメダカ <i>Oryzias latipes</i>	22	21.8 ± 3.6	12.9-28.3 (14)	6
サンフィッシュ科 Centrarchidae				
31. ブルーギル <i>Lepomis macrochirus macrochirus</i>	53	44.7 ± 22.6	16.7-91.0 (29)	8
32. オオクチバス <i>Micropterus salmoides</i>	16	68.1 ± 10.2	49.2-85.8 (13)	5
カジカ科 Cottidae				
33. カジカ (大卵型) <i>Cottus pollux</i>	3	29.2 ± 3.8	24.4-33.8 (3)	2
ドンコ科 Odontobutidae				
34. ドンコ <i>Odontobutis obscura</i>	151	39.7 ± 20.5	11.9-92.2 (72)	19
ハゼ科 Gobiidae				
35. マハゼ <i>Acanthogobius flavimanus</i>	1	71.1	—	1
36. スマチチブ <i>Tridentiger brevispinis</i>	2	62.2 ± 5.9	56.3-68.0 (2)	2
37. カワヨシノボリ <i>Rhinogobius flumineus</i>	369	32.9 ± 10.9	12.0-55.7 (126)	34
38. トウヨシノボリ <i>R. kurodai</i>	15	34.3 ± 12.5	18.5-52.5 (9)	4
39. シマヒレヨシノボリ <i>R. sp. BF</i>	4	25.2 ± 6.3	19.4-35.5 (4)	2
タイワンドジョウ科 Channidae				
40. タイワンドジョウ <i>Channa maculata</i>	3	122.5 ± 118.8	26.7-290.0 (3)	2
合計	3538			

※ 1. タウナギのみ全長.

※ 2. 括弧内は計測個体数.

となく、現在においても上流支川域がその主な生息域として機能しているものと考えられる。しかしながら、前記した検討課題も含め、本種についての繁殖状況、その成長について集積された知見は皆無に等しい。今後、本川とその支川域を包括した調査研究の進展に期待したい。

アユ

本種は187個体（5.3%）が記録された。2009年には0個体、2010年には地点番号31で1個体、地点番号36と37で各々2個体の合計5個体が記録されたに過ぎなかった。しかし2011年には129個体、2012年には53個体が記録され、この2年間でその記録個体数の大半を占めた。またその地点番号は29から37の本川中流から下流区間であった。2011年での調査で最も多獲されたのは8月24日・地点番号34で22個体、8月29日・地点番号35で19個体（共に投網各10回）、次いで7月6日・地点番号31で17個体（投網5回）であった。2011年の結果とその前2年との顕著な相違については、本種が、大阪生物多様性保全ネットワーク（2014）により新たに準絶滅危惧種にランクアップされている現況では、既報との比較に基づいた論議を行う必要がある。したがって採集日が近似し、かつ投網採集という方法で行われたいくつかの既報との比較検討した結果を以下に述べる。水野・宮城（1964）では塚脇（地点番号29）で1963年8月27日に投網26回で1個体のみ、高槻公害問題研究会（1979b）では1979年8月6日に塚脇橋（地点番号29）で2個体、門前橋（地点番号33）で2個体、そして芥川大橋（地点番号36）での1個体（各地点で投網5～10回）で合計5個体である。また遊魚対象として本亜種を6月～7月を中心とした時期に放流している漁業権漁場対象水域とした永井（2008）では2007年8月8日、その同上対象水域5地点（地点番号14～19）で33個体（投網20回）

と報告している。これら既報結果との比較によれば、本川の中流から下流域において2011年に記録された本種の個体数は顕著に多いものであることは明らかである。この結果を導いた要因については、淀川合流部から地点番号36に建造されている堰堤に2011年3月、魚道が設置されたことに起因すると言及しても過言ではない。これは平松ほか（1999）が指摘しているように、淀川から本川に遡上してくる本種をはじめとする魚種群は、本地点に建造されている堰堤により、その遡上を阻害されているという推測に基づく。なお、2011年における記録については、あくあびあ芥川共同活動体（2012）により一般配布用冊子の中で簡略に記述されてはいるが、その後の記録も含め、上記魚道での遡上状況、ならびに本報で記録された当該水域における成長・繁殖状況などについて詳細な調査が必要である。

ヌマムツ

本種は地点番号30から下流の6地点、および1支川である女瀬川の3地点において、稚魚から成魚にいたる個体が記録された。本水系における本種についての記録は既報においては全くない。これは本種がHosoya et al. (2003)により正式に記載され、近似種のカワムツとは側線鱗数などの形態的特徴により明らかに異なり、本和名が提唱されたことに起因するものと思われる。事実、当館所蔵標本における1970年代を中心に、本川の中・下流域から採集された個体の中には、側線鱗数の計数などに基づいた再調査結果から、本種と同定された若魚から成魚におよぶ成長段階の標本が多数存在することが判明している（花崎、未発表）。前記したような経緯のため本種についての大阪府下における記録は、カワムツと混同されてきた可能性が高い。近年における本種の分布情報については大阪府南部における花崎（2008）や平井

(2009), および淀川左岸側で合流する船橋川や天野川などでの記録を記した波戸岡・石田(2010)などに散見される程度である。今回、記録された地点のうち、地点番号30～35では近似種のカワムツとともに本種の生息が確認された。また、女瀬川の地点番号44においては、2回の調査ではあったものの多数の個体が記録された。大阪生物多様性保全ネットワーク(2014)では、本種は絶滅危惧Ⅱ類として選定されている。本水系における本種の生息状況やカワムツ、オイカワなどの近縁種との生息状況などについては、今後、詳細な調査研究に基づいた議論の展開に期待したい。

タナゴ亜科

本水系における本亜科魚種の記録は少なく、水野・宮城(1964)によって、ヤリタナゴ(1963年5月に1個体、同年9月に2個体、および11月に6個体；合計9個体)と「バラタナゴ」と記された種(同年9月と10月で計3個体)が塚脇(地点番号29付近)で採集されている。高槻公害問題研究会(1979a)では1974年と1977年にイチモンジタナゴが本川下流域(地点番号33～39の区間)で、また同研究会(1979b)により1979年8月にも鷺内橋(地点番号39)で本種が採集されている。しかしその後、本亜科に属する魚種は、本川の139

表2. 地点別の調査回数と記録魚種(○: 1～10個体, ◎: 11～50個体, ●: 51個体以上)。

地点番号	上流支川													本川の上・中流（ほぼ漁業権漁場）とその支川														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
調査回数	2	1	1	1	2	1	1	1	1	2	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1. コイ										○																		
2. ギンブナ										◎																		
3. アブラボテ																												
4. カネヒラ																												
5. タイリクバラタナゴ																												
6. ワタカ																												
7. ハス																												
8. オイカワ																		○	○	○								
9. カワムツ			○	◎	○		○	○	○	●		○		◎	◎		◎	●			○	○	○		○	○	○	○
10. スマムツ																												
11. タカハヤ	○			○	○		○		○				○	○						◎	○		○					
12. ウグイ																												
13. モツゴ	○																○											
14. カワヒガイ																												
15. ムギツク																												
16. タモロコ																												
17. ヨドゼゼラ																												
18. カマツカ																			○									
19. コウライニゴイ																												
20. コウライモロコ																												
21. ドジョウ					○					○				○							○							
22. シマドジョウ																												
23. チュウガタスジシマドジョウ																												
24. ギギ																												
25. アユ																			○									
26. ニジマス																												
27. タウナギ																												
28. ボラ																												
29. カダヤシ																												
30. ミナミメダカ																												
31. ブルーギル																												
32. オオクチバス																												
33. カジカ（大卵型）																												
34. ドンコ	○	○	○							○							○									○		
35. マハゼ																												
36. スマチチブ																												
37. カワヨシノボリ			◎	◎	◎			○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
38. トウヨシノボリ																												
39. シマヒレヨシノボリ																												
40. タイワンドジョウ																												

アブラボテは、2010年11月に体長45.0mm、2009年10月に同49.0mmの2個体のみが記録された。その採集地点はいずれも当館が立地する芥川緑地付近（地点番号31）であった。本種の産卵期は3～7月、淡水産二枚貝類のタガイやドブガイ

[illegible]

次にカネヒラについてであるが、地点番号36と39で2010年11月に、同39で2012年8月に記録された。その体長範囲は約45.0~65.0mmであった。本結果に含めた標本個体数は12個体にとどまったが、2012年8月の調査では、投網1回の採集により約40個体が記録された。宮地ほか(1976)によれば本種の産卵期は9~11月(琵琶湖)、タテボシ・セタイシガイなどの二枚貝類に産卵、孵化後1年で体長5~6cm、2年で9cmに成長、個体によっては1年で成熟するとされる。今回記録された個体はその体長から孵化後1年を経過、産卵管が伸長していた雌個体も含まれていたため繁殖個体群であるものと推測された。本水系における記録は今回が初めてとなるため、旧来からの生息状況やその多寡については全く不明である。ただし、今回記録された地点番号36から淀川合流部までの間には、堰堤などの河川を分断する構造物がなく、本種をはじめとする魚類にとっては容易に進入可能な水域である。淀川における本種の記録は、城北ワンド群を対象とし、1971年以降行われた調査において、2004年に初めてその採集魚種リストに登載されている(平松・内藤, 2009)。ただし、淀川水系の魚類について記述した久保(1958)によれば「枚方付近でよく採れる」とし、淀川本流とワンド域を調査対象とした矢田・加藤

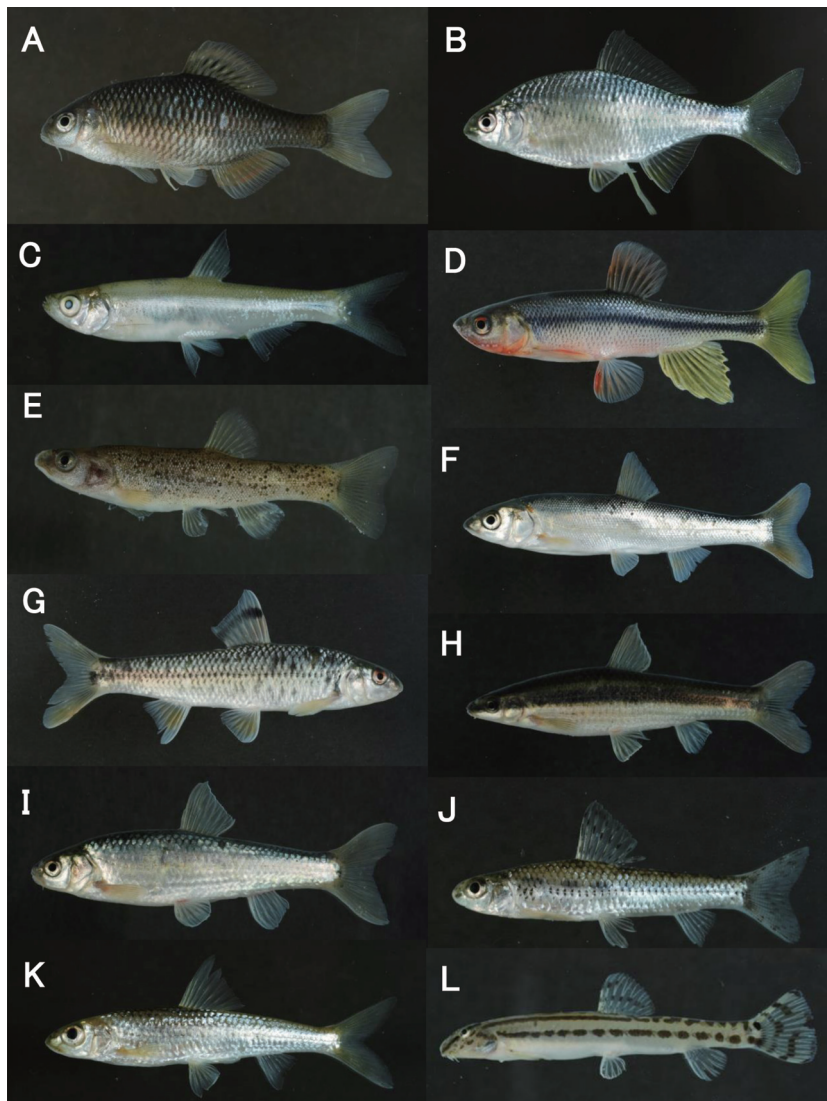


図 2. 芥川水系において2009年5月から2013年6月に記録された魚類12種. A. アブラボテ *Tanakia limbata*, AQP-F480, 49.0mmSL ; B. カネヒラ *Acheilognathus rhombeus*, AQP-F566, 60.9mmSL ; C. ワタカ *Ischikauia steenackeri*, AQP-F1997, 44.5mmSL ; D. ヌマムツ *Candidia sieboldii*, AQP-F1366, 86.8mmSL ; E. タカハヤ *Phoxinus oxycephalus jouyi*, AQP-F490, 68.8mmSL ; F. ウグイ *Tribolodon hakonensis*, AQP-F1191, 90.6mmSL ; G. カワヒガイ *Sarcocheilichthys variegatus variegatus*, AQP-F1221, 93.1mmSL ; H. ムギツク *Pungtungia herzi*, AQP-F1200, 62.7mmSL ; I. タモロコ *Ganthopogon elongatus elongatus*, AQP-F1197, 69.0mmSL ; J. ヨドゼゼラ *Biwia yodoensis*, AQP-F1218, 34.4mmSL ; K. コウライモロコ *Squalidus chankaensis tsuchige*, AQP-F471, 60.8mmSL ; L. チュウガタスジシマドジョウ *Cobitis striata striata*, AQP-F1189, 48.5mmSL.

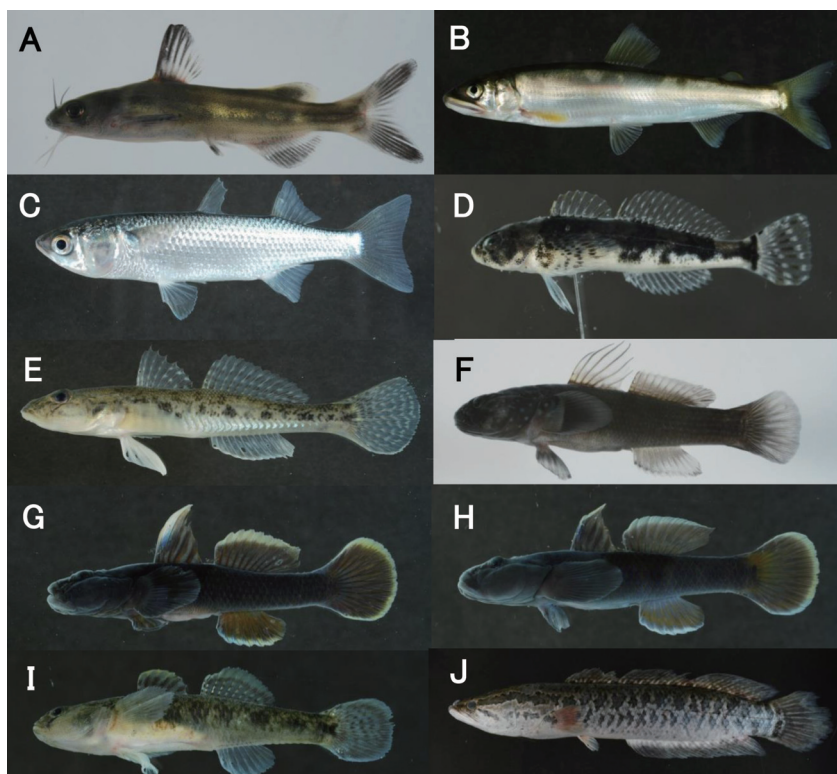


図 3. 芥川水系において2009年5月から2013年6月に記録された魚類10種. A. ギギ *Tachysurus nudiceps*, AQP-F792, 39.0mmSL; B. アユ *Plecoglossus altivelis altivelis*, AQP-F1936, 92.0mmSL; C. ボラ *Mugil cephalus cephalus*, AQP-F1203, 69.7mmSL; D. カジカ (大卵型) *Cottus pollux*, AQP-F778, 29.4mmSL; E. マハゼ *Acanthogobius flavimanus*, AQP-F1219, 71.1mmSL; F. スマチチブ *Tridentiger brevispinis*, AQP-F783, 68.0mmSL; G. カワヨシノボリ *Rhinogobius flumineus*, AQP-F1199, 54.8mmSL; H. トウヨシノボリ *R. kurodai*, AQP-F1999, 52.4mmSL; I. シマヒレヨシノボリ *R. sp. BF*, AQP-F1998, 35.5mmSL; J. タイワンドジョウ *Channa maculata*, AQP-F899, 290.0mmSL.

(1987) においても楠葉地域のみに分布するとしている。これらの記録のみから推測すれば、本川下流域で記録された本種は淀川から進入してきた個体群であるものと考えられる。なお、本川下流域では、本亜科魚類が産卵母貝として必要とするイシガイ科数種の生息が確認されており(花崎, 未発表), その繁殖にいたるまでの生活史を保証しうる重要な水域としての機能を有しているものと推察される。

ハゼ科

優占種の項で述べたカワヨシノボリを含め、マハゼ、スマチチブ *Tridentiger brevispinis*, トウヨシノボリ *Rhinogobius kurodai*, およびシマヒレヨシノボリ *Rhinogobius sp. BF* の5種が記録された。既報における本科魚種については、カワヨシノボリのみ(水野・宮城, 1964; 高槻公害問題研究会, 1979a; 大阪陸水生物研究会, 1983; 永井, 2008 など), もしくは「ヨシノボリ」とのみ記載され

ている（平松ほか，1998；平松ほか，1999）。後者の場合，本川全域を調査対象とはしているものの，その実体については不明である。したがって，カウヨシノボリと明示している前者既報との比較においては，4種が本水系からの初記録となる。

マハゼは1個体（体長71.1mm）が地点番号39で記録された。淀川における本種の記録は，東（1949），矢田・加藤（1987），波戸岡・石田（2010）などにあり，淀川大堰の下流から河口域に生息することが記されている。また，紀平・長田（1974）によれば，淀川大堰から約10km上流の左岸で1個体が記録されている。今回得られた個体は，淀川下流域から遡上，本川に進入してきたことに疑いの余地はない。本種はアユやボラのような遊泳力の高い魚種とは異なり，その能力があまり高くない底生魚である。本種の出現記録は今後，淀川下流から河口域にかけて生息しているハゼ科魚類に代表される底生魚が本川下流域から記録される可能性が高くなるということを示唆する。

ヌマチチブについては，地点番号36で2011年7月に体長68.0mm，地点番号39で同年8月に56.3mmの個体が記録された。その体長からいずれも成魚と考えられる。今回，本種が記録された両地点は前記したタナゴ亜科の項で記したカネヒラと同じ記録地点である。淀川における本種の記録については，本流・ワンドの両域から報告されており（田中・平松，2004），淀川から遡上してきた個体であるものと推測されるが，本水系と周辺水域における本種の生息・繁殖状況について論議するにはその知見があまりにも少ない現状である。

トウヨシノボリとシマヒレヨシノボリについては，前者が地点番号35で体長52.4mm（1個体），同42で体長25.5～52.5mm（7個体），同43で体長18.5～33.2mm（6個体），さらに同45地点で体長19.8mm（1個体），後者が同41で体長35.5mm（1個体）と同45で体長19.4～25.0mm（3個体）が記

録された。トウヨシノボリは，支川である女瀬川でその大半が記録され，その成長段階は稚魚から成魚にいたる個体であった。このことから，女瀬川とその周辺流域は本種にとっての生息適地として機能している可能性がある。シマヒレヨシノボリはその成長段階から稚魚，もしくは未成魚と考えられるものの，現時点では本水系における本種の生息状況などについて言及しえない。

マハゼを除いて，旧来から生息していたとも考えられるヌマチチブ，トウヨシノボリ，およびシマヒレヨシノボリ3種の本水系における現状について考察をするには，前記したように知見があまりにも少ない。したがって今後は，標本資料の集積とそれらに基いた論議の展開が必要である。

外来種

特定外来生物であるカダヤシ*Gambusia affinis*，ブルーギル*Lepomis macrochirus macrochirus*，およびオオクチバス*Micropterus salmoides*が記録された地点は淀川合流点から約4km上流までの流域に集中していた。これは，本水系におけるこれら地点を含む流域が3種にとって生息するに好適な環境要因があることを強く示唆する。ブルーギルとオオクチバスについては，今回記録されたその体サイズが稚魚から若魚にかけてと思われる成長段階であったことから，繁殖個体群が存在している可能性と，それらによって再生産され，稚魚レベルにまで成長を可能とする環境条件を提供していることは否めない。カダヤシについては，地点番号45で稚魚から成魚に至るまでの個体が多獲された。これはカダヤシにとってこの地点が繁殖とその産出稚魚の成育を保証しうる水域であるものと推測される。いずれにしても，これら3種については，本水系における今後の生息・繁殖状況と移動・拡散という観点などを中心に，重点的に注視することが不可欠である。なお漁業権漁場を

調査対象域とし、1962年以降、約5年間隔で行われてきた結果に基づいた魚種リストを提示している永井（2008）では、これら3種は記録されていないが、平松ほか（1998, 1999）によれば、当漁場流域の数地点、および当館が立地するやや上流域（地点番号30）での記録がある。

要注意外来生物として選定されているタイワンドジョウ *Channa maculata* が記録された。その採集地点は39で1個体（体長50.8mm）、同45で2個体（体長26.7mm, 同290.0mm）であった。本種と最も近縁な種として、我国ではカムルチーが旧来から広く知られている（宮地ほか, 1976; 前畑, 2005）。この近縁2種の識別点の一つに、背・臀鰭鰭条数の相違がある（細谷, 2013）。今回得られた3個体の背鰭と臀鰭の鰭条数はAQP-F785が40と26, 同786が44と27, さらに同899が41と27であり、いずれも本種と同定されたが、本種とカムルチーでは、交雑個体の報告もある（中谷・吉田, 1998）。また、波戸岡・金山（2007）によれば、本種は大阪府下全域における記録は少なく、情報・資料の集積が必要と記述している。本報では、記録個体の鰭条数計数結果から記録種リストに登載したが、今後、より多くの標本収集と資料集積を行い、それらに基づいた的確、かつ詳細な調査検討が必要である。

引用文献

- あくあぴあ芥川共同活動体（編）. 2012. 芥川の
アユ アユが町にやってきた！. 22pp. 高槻
市教育委員会, 高槻.
- 芥川緑地資料館（編）. 2013. 学ぶ・楽しむ高槻
の川 芥川の本. 88pp. あくあぴあ芥川共同
活動体, 高槻.
- 花崎勝司. 2008. 大阪府泉州地域における河川魚
類. 南紀生物, 50（1）: 144-151.
- 波戸岡清峰・金山 敦. 2007. 城北ワンドで採集
された外来魚コウタイと大阪府におけるタイワ
ンドジョウ科魚類の現状. *Nature Study*, 53
（12）: 158-161, 172.
- ・石田 惣. 2010. 2-8 魚類. 「第41回特
別展『みんなでつくる淀川大図鑑』展解説書」
（大阪市立自然史博物館編）, pp. 67-73. 大
阪市立自然史博物館, 大阪.
- 東 光治. 1949. 淀川の魚. 大阪博物学会会誌,
創立25周年記念号: 26-31.
- 平井規央. 2009. 大阪府の都市部とその周辺にお
ける水生動物の多様性調査. 関西自然保護機構
会誌, 31（1）: 79-83.
- 平松和也・内藤 馨. 2009. 淀川城北ワンド群の
魚類群集の変遷. 関西自然保護機構会誌, 31
（1）: 57-70.
- ・山本雅照・田中正治. 1998. 河川の魚類資
源保全基礎調査-I. 平成8年度 大阪府立淡
水魚試験場業務報告, 30: 5-16.
- ・——・——. 1999. 河川の魚類資源保全基
礎調査-II. 平成9年度 大阪府立淡水魚試験
場業務報告, 31: 12-20.
- Hosoya, K., H. Ashiwa, M. Watanabe, K.
Mizuguchi & T. Okazaki. 2003. *Zacco*
sieboldii, a species distinct from *Z. temminckii*
(Cyprinidae). *Ichthyological Research*, 50:
1-8.
- 細谷和海. 2013. タイワンドジョウ科. 「日本産
魚類検索 全種の同定 第三版」(中坊徹次編),
pp. 1656. 東海大学出版会, 秦野.
- 紀平 肇・長田芳和. 1974. §8 魚類および貝
類. 「淀川の河川敷における生態調査報告書」
(近畿地方建設局淀川工事事務所編), pp. 202-
251. (文献が古いため出版社・地不明)
- 久保敦弘. 1958. 郷土の自然(2) 淀川水系の魚
類. *Nature Study*, 4（5）: 56-58.

- 前畑政善. 2005. カムルチー, タイワンドジョウ.
「日本の淡水魚 3 版」(川那部浩哉・水野信彦・
細谷和海編), pp. 470-475. 山と溪谷社, 東
京.
- 宮地傳三郎・川那部浩哉・水野信彦. 1976. 原色
日本淡水魚類図鑑 全改訂 新版. 462pp. 保
育社. 大阪.
- 水野信彦・宮城正義. 1964. 大阪府・芥川におけ
る魚類の生息状態. 関西自然科学, 16: 10-14.
- 永井元一郎(編). 2008. 大阪府下の川と魚(河
川漁業権漁場の生物生態調査報告書 2007年調
査). 103pp. 大阪府環境農林水産部水産課,
大阪.
- 中坊徹次(編). 2013. 日本産魚類検索 全種の
同定 第三版. 1+2428pp. 東海大学出版会,
秦野.
- Nakajima, J. 2012. Taxonomic study of the
Cobitis striata (Cypriniformes, Cobitidae) in
Japan. Zootaxa, 3586: 103-130.
- 中谷義信・吉田 誠. 1998. タイワンドジョウ
*Channa maculate*とカムルチー*Channa arugus*の
自然交雑について. 和歌山県立自然博物館館報,
16: 23-28.
- 大阪陸水生物研究会. 1983. 大阪府下の川と魚
(河川漁業権漁場の生物生態調査報告書). 159
pp. 大阪府農林部水産室, 大阪.
- 大阪生物多様性保全ネットワーク(編). 2014.
大阪府レッドリスト2014. 48pp. 大阪府環境
農林水産部みどり・都市環境室 みどり推進課,
大阪.
- 鈴木寿之・陳 義雄. 2011. 田中茂穂博士により
記載されたヨシノボリ属 3 種. 大阪市立自然史
博物館研究報告, 65: 9-24.
- 高槻公害問題研究会. 1979a. 芥川の魚類(I)
さで網とタモ網採集による魚相の経年変化
(1972年~1978年). Nature Study, 25 (10):
113-117.
- . 1979b. 芥川の魚類(II) 投網による魚種
の確認(1979年). Nature Study, 25 (12):
122-128.
- 田中正治・平松和也. 2004. 淀川の生息魚類の分
布およびその生態. 水生生物センター研究報告,
12: 64.
- 渡辺 昇. 1969. 樫田魚類誌. 26pp. 高槻市立
樫田小学校, 高槻.
- . 1971. 樫田魚類誌 2 (増補版). 44pp. 高
槻市教育研究所, 高槻.
- . 1973. 芥川上流の魚類(摂津峡下の口大橋
より上流). 14pp. 高槻市教育研究所理科セン
ター・高槻市教育研究会理科部, 高槻.
- 矢田敏晃・加藤喜久也. 1987. 淀川の魚類相と生
息状況. 大阪府淡水魚試験場研究報告, 9: 125
+ 72pp.